

三田文学 2025年夏・秋合併号 新同人雑誌評 加藤有佳織

住田真理子「不機嫌の系譜父・木辺弘児」を興味深く読みました。

季刊文科101号同人雑誌季評 越田秀男

夫の介護に追われるなか96歳の母が入所したばかりの施設で急死。母の生き様を回顧しながら、自分達の日日を振り返った「高原あふち「日日是日日」」。主人公と夫はケーキ屋を立ち上げて実績を積み上げ、ネット販売に乗り出し、大忙しの最中、夫が病に、多発性脳梗塞、そして後遺症との格闘。リハビリは大切だが、元に戻ることはない。廃業。ディケア施設で夫はプリンを作った。夫「やっぱり難しかった。でも、美味しいって拍手してくれた」。

※今、生きている、という実感。

季刊文科101号同人雑誌季評 谷村順一

切塗よしを「駝鳥の見る夢」は、悪性リンパ腫を患い、死期の迫った元同僚の「ある願い」を叶えるために奮闘する無職の「ぼく」が主人公だ。市役所庁舎の小修繕を十二年にわたってひとり担ってきた嘱託職員の「ぼく」と同僚の藤崎は、庁舎の建て替えのため「ぼく」の契約が打ち切られてもなお親しく付きあう間柄だ。末期を迎えた藤崎の「ある願い」とは、かつて暮らしていたダチョウ牧場の牧場長の娘、同い年の小夜子の裸婦画を描くこと。国立工業高等専門学校から美術大学編入のため、等身大のビーナス像でデッサンをつづけるうち、「生身の人間をモデルにして、真に美しい裸婦画を描いてみたい」との思いが抑えきれなくなった藤崎にとってモデルは小夜子以外には考えられず、小夜子もその願いを受け入れるのだが、

神戸新聞 2025年9月24日付 同人誌 葉山ほずみ

住田真理子「不機嫌の系譜父・木辺弘児」。作家だった76歳の父が急死。浴槽内での急性心不全だと診断されたが、私は父の死は自殺ではないかと考えている。その理由は、白い封筒に入っていた年賀状代わりの手紙に「人類が成長を止め崩壊に向かうグラフ「人類があと百年ほどでその後カタストロフィーに向かっている」と書かれていたからだった。

葬儀の後、仕事先の文学学校から父の年譜を作成してほしいと頼まれる。作業を通じ、自分を語らなかった父を理解することに。遠くて近い存在だった父の、観察者としての視点が浮かび上がってくる。

民主文学2025年9月号 支部誌・同人誌評 松田繁郎

同人誌では西田恵理子「花びらの記憶」に注目した。

吉田直子と正和、息子の有樹の三人家族と、直子の母を交えた関係性の中に、時代の家父長制の固定観念にも似た情念とのたたかいが浮き彫りになる。直子の息づかいまで描く、繊細で、スリリングな小説である。

ピリピリする一つは、大学に行かず、専門学校へ行き、早々に就職が決まった息子、有樹に対する直子の複雑な感情。もう一つは、自分の母親との関係に悩む直子の感情である。その複雑な気持ちは右手の甲の上にある小さな傷跡と幼い頃の花びらの感触に残っているのである。

直子たちは数年前に岡山市の西端にある建売住宅を買い、それなりに平穏な生活を送っていた。ところが、二カ月前、職場にいる直子に母の冬村昌代から電話がかかってきた。家の中で転んだというのだ。病院に連れて行くと大腿骨骨折とわかった。その後、冬村昌代はリハビリ病棟に移っており、兄の宏人が病院へ見舞いに来るとのメールに嬉々としている。直子の父親は三年前に亡くなっており、昌代によって相続のことはうやむやにされている。孫の有樹を可愛がってくれる吉田の義父母と、孫よりも自分の息子を可愛がる冬村昌代の性格の違いを有樹もわかっているのである。

兄が会社を早期退職して岡山に帰ってくることがわかる。兄との会話の中で、直子が四歳の頃、右手の甲にケガをした真実が明らかになる。直子が祖母の離れに行き、兄の宏人が直子のぬいぐるみを取り上げて揉めている時に食事を運んできた母・昌代とぶつかり、窓ガラスで手を切ったのである。何かにつけて右手の甲を触る癖がついている直子に母・昌代が娘にケガをさせた当てつけのように感じているのではないかと思ひ当たってゆく。

庭にあった木蓮とともに思い出したのは、ケガをした直子を慰めてくれたのは祖母だったことだ。そして思わず「一体、私はお母さんの何なん？」という言葉がべろりと出るのである。緊張が最高度に達した後、「そんなん、娘に決まっとるでしょうが」という昌代の返事を聞いて、母の娘という呪縛から解放される直子の姿が男優先社会とのたたかいに勝利したように読めるのである。

母の家から自宅に帰ると、有樹が連れてきたらしい「カノジョ」との笑い声が聞こえるのだった。綿密な構成の元に、謎を提示しながら、方言を用いて読ませる力は相当なものである。

樹林 小説同人誌評 45 細見和之

『あるかいど』第78号掲載の、住田真理子「不機嫌の系譜父・木辺弘児」は、作家・木辺弘児の姿をじつの娘の視点で捉えた五〇枚ほどの作品。

技術系サラリーマンでかつ作家として二度芥川賞候補にもなった木辺は、文学学校のチューターを長く続けていたので、文校周辺でよく知られているはずだが、素顔となると分からないことが多い。ここでは「父と私は、幼い頃からずっと文学友だちであった」とあり、またある時期から清書を担当したのも自分だった、と打ち明けられている。それでいて木辺は娘にとっても謎の多い存在だったことが分かる。その謎にあたるものを記しつつ、父の作品から作者である娘が引用する。素顔の父と作品の言葉――。そこにはスリリングな空間が開かれている。

樹林 小説同人誌評 45 細見和之

同誌掲載の、西田恵理子「花びらの記憶」は、やっかいな母親と娘の関係を娘「直子」の視点で描いた、五〇枚強の作品。

直子は岡山で夫と息子の三人暮らし。冒頭、直子は家族三人の洗濯をしているが、それを終えらともう一度洗濯をする。入院している母親の分である。その後、直子はパートをしているホームセンターへ出勤し、さらに母親・昌代の病室を訪れる。昌代は忙しい直子に毎日病室を訪れることを強要しているのだ。

しかもその日、直子の兄で長男の宏人（ひろと）が明日徳島から見舞いに来ると昌代はうれしそうに伝える。さらに、その宏人のために、布団を干してシーツをかけておけと自宅の鍵を直子に渡す。昌代は以前から長男の宏人を可愛がり、直子には冷たくあたり続けてきたのだった…。

自分の価値観を振り回し、まったくもって傍若無人の昌代だが、直子にはなお昌代に対するかすかな思いがあるようだ。タイトルにある「花びらの記憶」、幼い日に昌代のせいで負った指の傷、家のそばの、まだ鯉が産卵する用水路——。いずれも、昌代とのほのかな繋がりを示唆していると感じられる。